平成２２年　４月　２４日

地域貢献活動支援報告書

社会連携研究センター長　殿

所　属　人文学部・文化学科
氏　名　　塚本　明

活動テーマ	熊野市大泊町善根宿に伝わる江戸時代の「納札」の調査と活用
実施期間	平成２１年　６月　１日　～　平成２２年　３月３１日
活動内容	①　調査・撮影作業 まず前提作業として他経費（塚本の科研費）を用いて事前調査・打ち合わせを現地で数度行い、所蔵者の若山正亘氏にも面談して調査状況を説明し、報告書・展示を通した史料公開の了解を得た。 平成 21 年９月 12 日から 14 日まで、三重大学の塚本研究室 12 名（塚本、学部学生７名、院生２名、科目等履修生２名）と熊野市の市民グループ・熊野古文書同好会（県立熊野古道センターのコーディネーターも含む）７名、そして三重県立博物館の学芸員３名と合同の調査を、熊野市金山町の熊野少年自然の家にて行った。保存状況を確認しつつデジタルカメラによる撮影を行い、これにより情報が半永久的に保全できることとなった。 調査期間中、古文書整理の方法論や保存措置、「納札」の歴史的意義について随時解説し、また休憩時間などを利用して、市民の方々の協力を得、熊野市周辺の歴史・自然遺産の見学も実施した。 ②　報告書作成作業 調査終了後、報告書作成の準備に着手し、熊野古文書同好会とともに、画像データと目録とを照合しつつ情報の確認と表現を統一させていく作業を進めた。6000 点のデータについて計３度のチェックを行い、学術的な利用に足る精度にまで高めることができた。 並行して納札の資料的な価値と調査の意義を明らかにする論考「解説―若山家所蔵善根宿納札調査の意義」をまとめ、報告書に掲載した。また、口絵に載せる納札の解説文の作成に熊野古文書同好会のメンバー８名、学生・院生５名が執筆し、塚本はその指導・添削にあたった。 最終的に熊野市及び県立熊野古道センターからの財政支援を得て、口絵写真・解説 18ｐ、データ編 125ｐ、論考編 34ｐを含むＡ４版 188ｐの報告書を 2010 年１月末に刊行し、東紀州地域を中心に大きな反響を呼んだ。 ③　展示による公開及び報告会 2010 年 1 月 30 日から２月 14 日まで、熊野市文化交流センターで開催された三重県立博物館の移動展示「巡礼の道～伊勢参宮と熊野詣」の第三部「熊野詣と熊野街道」において善根宿納札約 50 点を展示し、その解説（キャプション）を三重大学と熊野古文書同好会で担当した。期間中の展示説明も市民が交代で参加し、訪れた人たちに歓迎された。 展示期間中の２月６日、「納札が語る熊野古道の旅」と題して調査報告会を開催し、塚本は「様々な納札―若山家文書の面白さ」と題して報告した。また市民グループと共に調査の意義に関するシンポジウムにもコメンテーターの一人として発言した。この報告会には、熊野市民を中心に 169 名の出席を得たが、これは会場の文化交流センター開設以来最多の人数であった由である。マスコミ等でも中日新聞

	や読売新聞で報道されたほか、地元紙の吉野熊野新聞、南紀新報、南紀州新聞等では展示期間中を中心に再三にわたり大きく取り上げられた。 　県立博物館の移動展示の後、尾鷲市の三重県立熊野古道センターの企画展「全員集合　熊野の観音様」でも関連する納札が展示され、解説パネルも活用された。 ④　調査に関する反響 　今回行った古文書の調査と活用は、大学と市民グループ、そして県立博物館の三者が連携して文化活動を構築したところに大きな意義がある。市民が大学の支援を受け、主体的な活動を展開して博物館を活用した格好の事例となり、博物館活動の一つのモデルケースともなったと自負している。このことは、結果的に新県立博物館の建設を推進する役割をも果たすこととなった。 　2010 年２月 16 日付けの中日新聞は、「しあわせは見えるか一検証・新年度県予算案　２」のなかで熊野市での調査報告会を取り上げ、塚本のコメント及び熊野市民の声を紹介し、博物館の意義を解説している。県議会でも、博物館問題に関する質疑応答のなかで、善根宿納札に関する活動が何度も紹介された由である。 　三重大学としては、この活動を通して県立博物館関係者との確固たる信頼関係を構築できた点も、大きな成果と言える。 ⑤　教育的効果 　調査に参加した学生たちにとって、貴重な文化財に直接触れるという得難い経験をすることができた。県立博物館の学芸員と共に、整理・撮影、そして展示に到までの作業を行ったことは、学芸員実習に勝るとも劣らぬ教育効果があっただろう。調査後は歴史資料についての意識も高まり、史料解読能力も格段に向上している。 　文化財や歴史学の学習に留まらず、市民や学芸員の人たちと協同することで、社会的経験値を積んだ意味も大きく、インターンシップ的な意義もあったことと思われる。 ⑥　学術的意義 　本事業で扱った史料は、一部を交通史研究会等の学会で紹介し、注目を集めた。また塚本の科学研究費の報告書『江戸時代における参詣街道沿いの地域社会の構造』でも取り上げた。調査の過程で関係領域の研究者と交流を図り、刊行した報告書についても、複数の研究機関や研究者から既に反響が寄せられている。 ⑦　今後の展望 　県立博物館との間では、今後も積極的に合同調査を行うことを申し合わせている。2009 年３月 24 日、26 日、27 日の３日間、塚本研究室 16 名（塚本、学部学生 13 名、院生１名、科目等履修生１名）と、県立博物館のサポートスタッフ（社会人のボランティアスタッフ）14 名と共同で、県立博物館所蔵の古文書（松阪の西之庄村文書）の調査・整理作業を行った。現在、目録化に向けて作業中である。この調査も学生、社会人双方から好評であり、県立博物館との新たな連携事業として今後も実施する予定である。 　熊野地域には未整理の古文書が多く、熊野古文書同好会を始め地元からは、三重大による調査が引き続き行われることを望む声が大きい。また学生からも古文書に触れる機会を得たいとの要望も強い。現在、地元諸団体と調整中であるが、今年度以降も地域に赴いての文化財調査を継続的に行っていきたいと考えている。
継続希望の有無	（この計画自体は終了しましたが、上記のように地元からの要望が強いこともあり、引き続き市民と連携した古文書調査を行う予定です。今後もご支援のほど、お願い致します）。